

法科大学院教育における インデックス付き講義収録システムの利用と評価

Use and evaluation of an Indexed Digital Video Recordings System
in the lecture of Law at Law School Education

富崎 おり江*・千葉 恵美子*

Orie TOMIZAKI*, Emiko CHIBA*

名古屋大学大学院法学研究科*

Graduate School of Law, Nagoya University*

<あらまし> 法科大学院教育では、限られた期間内に新司法試験を受験できるレベルに引き上げることが求められており、そのためには効果的に教育することが課題となっている。法学教育の初期段階においては、聞き逃したところや理解できなかったところを随時確認できるようにすれば学生はより理解を深めることができると考え、講義を繰り返し視聴できるインデックス付き講義収録システムを独自開発し利用している。収録した講義の視聴ログの調査から講義収録システムは法科大学院のようなプロフェッショナル・スクールでは必要とされていることがわかった。

<キーワード> 法科大学院、法学教育、新司法試験、講義収録、マルチメディア

1. はじめに

法科大学院とは、法曹養成に特化した教育を行うプロフェッショナル・スクールである。多様なバックグラウンドを持つ学生に、2年ないし3年の限られた期間内に、新司法試験を受験できるレベルにまで引き上げることが求められる。そのためには、断片的な知識の蓄積や正解のみを追い求めがちな学習スタイルを排除し、質を維持することが喫緊の課題と考えられている。

このような課題に取り組むため名古屋大学法科大学院では、Web システムを使った法学教育支援システムを独自開発し教育現場で実際に活用してきた。本報告では独自開発したシステムのうち、収録した講義を繰り返し視聴できるインデックス付き講義収録システム（通称「お助け君ノートシステム」）の利用状況から法科大学院教育での講義収録システムの有効性について評価する。

2. お助け君ノートシステムとは

名古屋大学法科大学院が独自開発したお助け君ノートシステムとは、講義と同時並行してデジタルビデオ録画を行う。学生はMS-Wordで講義ノートを取り、講義中もう一度聞きたいと思った時点でアドイン・ソフトウェアインデックスを付ける。講義修了後、MS-Wordで作成した講義ノ

ートのインデックスをクリックするともう一度聞きたいと思ったところから講義が自動再生されるシステムである（伊藤ほか2006）。このシステムの特徴は、従来の収録システムは講義の最初からの再生となるので、もう一度見たいと思った部分を探して再生するためには早送りと巻き戻しの作業を繰り返さなければならないが、お助け君ノートシステムによってこのわずらわしさが解消される。

限られた短い期間で効率よく学習させるためには、対面講義外における学習支援の充実化も求められており、お助け君ノートシステムを導入することで支援している。しかし、本当に支援できているのか確認するため学生の利用状況について調査することにした。

3. 利用分析と評価

利用状況を調べるため、お助け君ノートシステムで収録した講義を視聴したアクセス数を調査した。調査期間は2006年度から2008年度の3年間。講義を収録しているのは「法律基本科目」（必修科目・講義形式・1年生対象）の15科目中13科目。利用対象者は講義を収録している科目の受講者である。受講対象は1年次生で、年平均約60名。アクセス調査結果を図1に示す。

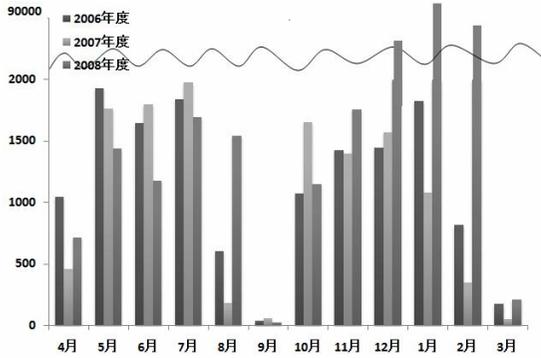


図1 2006年4月~2009年3月のアクセス状況

図1のグラフから、授業期間中にアクセスしているのが、授業の復習に活用していることがわかる。特にアクセス数が著しく多くなるのは定期試験前であることから、平常の授業の復習だけでなく試験対策にも利用していることがわかる。法科大学院は必修科目が多いうえに課題も多く、いくら時間があっても足りないぐらいである。にもかかわらず、収録した講義を視聴して復習しているのは、講義収録システムにインデックス機能を付け、聞き逃したところや理解できなかったところを簡単に再生できるからである。

次に、講義科目やクラスによってアクセス数がどのように変化するのか調査した。結果を表1に示す。調査対象は2008年度のアクセス数。アクセス数100以下の科目は対象外とする。補講は科目ごとに集計できないので、科目ごとの集計に入れていない。

同じ科目でAクラスBクラス同じ担当教員の科目に注目すると、Aクラスのアクセス数がBクラスより約1.7倍から3.4倍多い結果となっている(表1網掛け部分)。1年生のAクラスの学生

表1 2008年度講義科目別アクセス数

	担当教員	A クラス	B クラス	倍 率
刑法基礎I	A.B 同じ	105	250	
刑法基礎II	A.B 同じ	6415	3744	1.7
民法基礎I		321	990	
民法基礎II	A.B 同じ	413	554	
民法基礎III	A.B 同じ	2891	841	3.4
民法基礎IV・V		17319	8610	
憲法基礎I	A.B 同じ	2552	1188	2.1
憲法基礎II	A.B 同じ	4039	2360	1.7
商法基礎	A.B 同じ	8228	16845	
行政法基礎	A.B 同じ	7003	3161	2.2

は、法律履修度が低い法学部出身者及び法科大学院に入学して始めて法律を学ぶ学生であり、Bクラスの学生は法学部出身者など法律学習経験がある学生である。Aクラスのアクセス数が多いのは、法律履修度が比較的小さいため講義を繰り返し聴いて復習していることが原因と考えられる。

Bクラスのアクセスが著しく多いのは商法基礎の1科目のみである。この原因は、講義内容のレベルが高く、Bクラスの学生には理解できるが法律履修度の低いAクラスの学生には講義を繰り返し視聴しても成果が上がらないと考えたためではないかと思われる。

4. まとめ

本システムのような講義収録システムで収録した授業を繰り返し視聴できるようにすることは、学生が自由に発言することの妨げとなるのではないかと、教員が言い間違えたことを繰り返し聞かれるのは困るといったマイナスの意見もある。しかし、まず必要なのは法律の基本的知識を習得することである。アクセス数の調査結果から、お助け君ノートシステムは基本的知識の習得に必要なとされており、特に法律履修度が低い学生に基本的理解の確認に貢献していることが理解できた。また、本システムは外部からの評価も高い。独立行政法科大学院評価・学位授与機構による平成20年度実施の法科大学院認証評価において、教育方法の優れた点の項目で「お助け君ノート」の整備により授業時間外における学習を充実させているとの評価を受けている。

このように内部と外部からの評価が高いので、本システムのような講義収録システムは法科大学院のようなプロフェッショナル・スクールでは必要なシステムであることがわかる。今後も利活用し続けるインセンティブとなった。

参考文献

伊藤栄寿, 鈴木慎太郎, 角田篤泰, 富崎おり江, 菅原郁夫, 松浦好治 (2006) インデックス付き講義収録システムの開発と運用. 情報処理学会研究報告第3回CMS研究会予稿集: 55-62